## 2 DX時代のPLM/BOM/PDMを用いた設計業務改善

## 第2部:最新のソフトウェア事例2

## 持続的DXを可能にする「Aras Innovator」 ~設計情報の有効活用を可能にする エンタープライズPLM

アラスジャパン 宮岡 鉄哉\*
\*みやおか てつや:マーケティングディレクター

## 製造業がかかえるジレンマ

今、日本経済はかつてない厳しい状況にある。 労働人口の高齢化による人材不足、抜け出せない 低価格競争によるデフレスパイラルなど理由は 多々あると思われるが、無視できない原因の一つ が「デジタル化の遅れ」で、特にコロナ禍におけ る給付金や補助金の支給に関する混乱によってそ れが露呈した形となった。もともと日本の製造業 はIT投資に積極的で、他国と比較しても早いうち からデジタル化が進められたが、製図版が2次元 CADに置き換えられた例のように、現状の業務や 仕組みをデジタルツールに置き換えることが中心 で、デジタル技術を活用して業務そのものを変換 するいわゆる DX にはなっていなかった。また、 社内の部門ごとにデジタル化が進められた結果、 かえって業務や部門間にシステムやデータの壁が できてしまい、業務や部門をまたがってデータや 情報が活用されにくい状況を生み出してしまった (図1)。

一方、自動車の電動化や自動運転に代表されるように、今のモノ(製品)は指数関数的に複雑になってきている(図2)。昔は製品の設計情報の中心

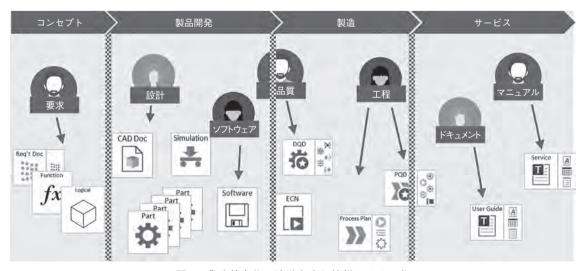


図1 業務効率化の障壁を生む情報のサイロ化